

63 桜の季節がもつ両義性

医事万華鏡

桜の開花と言う

と、晴れ晴れしい季節ではありますが、単なるカレンダーの一頁ではなく、私たちの心をもっとも激しく波打つ「境界線」

のような時間とも言えます。そこには、相反する二つの感情が同居する「両義性」が、淡い花びらとともに舞っています。つまり、桜がもつ最大の両義性は、「別れ」という過去への惜別と、「出会い」という未来への高揚が、同じ一本の樹の下で同時に起こることです。

私たちは、昨日まで当たり前だった景色や仲間との時間を惜しみ、散りゆく花に自分たちの「過去」を投影します。しかし、風に舞う花びらの隙間からは、すでに新しい季節の光が差し込んでいます。別れの痛みは、それだけ深い時間を共有できたという証であり、その痛みを抱えたまま一歩を踏み出すことで、私たちは新しい出会いを受け入れる準備を整えるのです。

別れが辛ければ辛いほど、私たちはその喪失感に目を奪われがちですが、桜が教えてくれるのは、形あるものはい

つか必ず「散りゆく」という無常の真理と、だからこそ「出会えた奇跡」に対する深い感謝が際立ちます。「さよなら」の瞬間に、失う悲しみだけを数えるのではなく、「あなたに出会えて、私の人生は豊かになった」と感謝できる姿勢。それこそが、過去を停滞した思い出に留めず、未来へと繋ぐ力になります。感謝を伴う別れは、心の中に永遠に枯れない桜を植えるようなものです。

この「別れと出会い」の両義性は、医師と患者の関係においても極めて重要な意味を持ちます。病院という場所は、人生の岐路における「出会い」と、時には「究極の別れ」が交錯する場です。ここで医師が持つべき誠実さは、単なる技術の提供に留まりません。桜がその一瞬の輝きに全力を尽くすように、医師もまた、目の前の患者の苦痛や不安に寄り添い、その瞬間において最善を尽くすことが求められています。患者にとつて、困難な病と闘った記憶の中に、誠実で温かな医師の姿が刻まれていることは、その後の人生を歩む上で大きな支えとなります。「出会えた喜び」を患者に感じてもらうこと。それこそ技術を越えた「癒しの本質」と言えるでしょう。

桜の季節は、私たちに「終わりは始まりの準備である」と囁きかけます。別れを惜しみ、涙を流すことはあっても、その根底には出会えたことへの深い感謝を携えていたいものです。それは人生の旅路においても、医療の現場においても、人と人が響き合うための最も美しく、切実な形なのです。

(JMS主幹・野村元久)

